

FLORA KANAGAWA

Jun. 20. 1998 No. 46

神奈川県植物誌調査会ニュース第46号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



イワナギシダ。湯河原の千歳川にて(1996年7月1日, 勝山輝男氏撮影)。

勝山輝男：湯河原の植物調査(2)	508
内山 寛：三木茂博士の水草標本	509
勝山輝男：神奈川県産の植物と植物誌1988の忘れ物	510
武井 尚：川崎市川崎区に追加される植物	511
山本 明：ホクリクイヌワラビ?	512
河津英子：セイコノヨシ横浜市南区に健在	513
河津英子：横浜のフシネキンエノコロ	514
後藤 昭子：モエジマシダ横浜市神奈川区で発見 —国内帰化か逸出?—	516
城川四郎：ササ情報	517
田中徳久：「神奈川県植物誌1988」で取り上げられていない帰化植物ほか(1)	518
埜村恵美子：チャボウシノシッペイ	519
事務局：1998年度総会報告	520

湯河原の植物調査(2)

(勝山輝男)

前号に引き続き、最近の湯河原の調査記録の中からめばしいものを紹介する。

ヒメサジラン

Loxogramme grammitoidea (Bak.) C.Cgr.

かつては丹沢や箱根から多くの報告があったが、植物誌1988では標本が得られなかった。丹沢では1994年に世附川の上流で採集されたが、箱根方面では消息不明のままだった。今回、湯河原町の新崎川の源流域で、沢筋のコケに被われた岩に一面に生えているのが見出された。

アオネカズラ

Polypodium niponicum Mett.

植物誌1988の調査では箱根の須雲川と奥湯河原で採集されている。奥湯河原のものはまだ健在である。2個所に大きな群落を見出した。どちらも急峻な岩場で、やっと標本を得ることができた。

イワヤナギシダ

Loxogramme salicifolia (Makino) Makino

箱根、湯河原、西丹沢に記録があるが、植物誌1988では見出せなかった。今回、湯河原町の新崎川源流域で見出された。渓谷沿いの岩場に数株がついていた(表紙写真参照)。



カラクサシダ

カラクサシダ

Pleurosoriopsis makinoi

(Maxim. ex Makino) Fomin

湯河原では1950年代に採集された古い標本が残されているが、植物誌1988では記録できなかった。今回、湯河原町の新崎川、新崎川(写真のもの)のそれぞれの源流域で見出された。過去の記録は丹沢や箱根に点々と見られるが、植物誌1988では丹沢山で標本が採取できたただけであった。丹沢でも最近、早戸川本間沢や中川川モロクボ沢で採集されている。沢筋の湿った岩のコケの中に生える小型のシダで、注意しないと見逃してしまう。

オニヒカゲワラビ

Diplazium niponicum Tagawa

植物誌1988では湯河原で田中一雄氏により採集されただけであった。写真の株も千歳川源流域で撮影したもので、おそらく同じ群落と思われる。1997年現在、健在で



オニヒカゲワラビ



ヤマトキソウ



ヒトツボクロ

ある。植物誌1988では湯河原のみで記録されたが、その後、浜中義治氏により鎌倉で採集され、田中一雄氏は南足柄市や小田原市の数ヶ所で採集されている。

ヤマトキソウ *Pogonia minor* Makino

過去に記録はあったが、植物誌1988では標本が採集できなかった。その後、1992年に長谷川義人氏が湯河原の幕山で採集された (FLORA KANAGAWA No.32)。今回、幕山に隣接する星ヶ山でも茅原の中に隠れるように生えているのを見出した。湯河原で2ヶ所目の記録である。また、1997年には箱根でも採集されている。

ヒトツボクロ

Tipularia japonica Matsum.

植物誌1988では箱根で1ヶ所採集されただけである。湯河原町の新崎川流域で10数個体がかたまって生えているのを見出した。今回の調査では、丹沢でも筆者らにより世附川流域で2ヶ所、久江氏により神の川流域からも発見されている。

三木茂博士の水草標本

(内山 寛)

三木茂博士は日本の水草研究の基礎を築かれた先生であり、多くの新種を記載された。先生の研究に使用された標本は、大阪市立自然史博物館に寄贈され収蔵されている (大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第10集、1978、三木茂博士寄贈水草さく葉標本目録)。その標本を調査したところ、神奈川県産の標本として以下の12種があった。

ツツヤナギモ (馬入川 15-VII-1917 久内清孝)、エゾノヒルムシロ (芦ノ湖 17-X-1932 三木、この標本はササエビモとみなされるものである)、センニンモ (芦ノ湖 17-X-1932 三木)、ミズヒキモ (川崎市玉川の支流 15-VI-1919 久内)、ヒロハノエビモ (芦ノ湖 17-X-1932 三木)、ヒメイバラモ (芦ノ湖

17-X-1932 三木),ウミヒルモ(三浦油壺 21-VIII-1919 三木),クロモ(横浜 8-VII-1912 久内;芦ノ湖 17-X-1932 三木),トチカガミ(逗子 s. dat. 久内),セキシヨウモ(芦ノ湖 17-X-1932 三木),ヒンジモ(鎌倉円覚寺舍利殿裏 12-VII-1933 久内),ホザキノフサモ(馬入川 3-VI-1917 久内)。

これらのうち、ツツヤナギモとヒメイバラモは(分類学的な再検討が必要な種ではあるが)神奈川県植物目録1933,植物誌1958,1988,レッドデータ生物調査報告書に記載されたことがなく,その他の種も現在では神奈川県下で,ほとんど見ることができなくなった種であるので,証拠標本に基づいた分布資料として重要であると考え,ここに報告した。

標本の閲覧に便宜を頂いた大阪市立自然史博物館の岡本素治博士に感謝いたします。

神奈川県新産の植物と

植物誌1988の忘れ物

(勝山輝男)

前号に「忘れ物」と題して,神奈川県植物誌1988で漏れてしまった植物に関して小文を書いた。その後も県内新産,あるいは標本や文献記録があるのに植物誌1988では取り上げられなかったものが見出されている。備忘録を兼ねて,FLORA KANAGAWAで報告しておきたい。

サカキカズラ

Anodendron affine (Hook. et Arn.) Druce

国際生態学センターの村上雄秀氏から,横須賀市猿島で採集されたサカキカズラと思われる標本を送っていただいた。収蔵庫を調べてみると,県博に西尾和子氏が1960年に,同じ猿島で採集した標本(KPM-NA0001766)が入っていた。神奈川県

植物誌1988ではサカキカズラは取り上げられていない。1958年の神奈川県植物誌にも載っていない。村上氏によると現地には立派な株が生育しているという。サカキカズラはキョウチクトウ科のつる性木本で千葉県以西に分布する。

ホソバタブ(アオガシ)

Machilus japonica Sieb. et Zucc.

ホソバタブは関東南部以西に分布するクスノキ科の常緑高木であるが,神奈川県にはないものと頭から決め付けていた。もちろん神奈川県植物誌1988でも取り上げられていない。ところが,最近,県博のホソバタブの標本を見ていたところ,長谷川義人氏が1980年1月19日に大磯町高麗山で採集された標本(KPM-NA1039746)が入っていた。この産地のものは植栽されたものの可能性が高いと聞いている。しかし,神奈川県植物誌(1958)では生育地は暖地,近海地としてあげられているので,あるいは自生のものが見つかる可能性もありそうである。南部の沿海地を調査される方は注意する必要がある。タブノキに比べて,葉は質が薄く,幅が狭く,先が鋭く尖る。

アメリカミズユキノシタ

Ludwigia repens Forst

小田原市の松岡輝宏氏が酒匂川飯泉取水堰で1993年に採集された標本を提出してくださった。北アメリカ原産のユキノシタ科の水草。ミズユキノシタに似ているが,どことなく異なるものと思い,北アメリカの植物誌にあたってみたところ *L. repens* と判明した。ミズユキノシタとは葉が対生する点で区別できる。どこかに記録はないかと調べてみると,角野(1994)「日本水草図鑑」のミズユキノシタの項に京都の深泥池で帰化が記録され

たことが付記されていた。京都の記録は村田・彭(1988, 植物分類地理39:150)である。

ショウジョウソウモドキ

Euphorbia prunifolia Jacq.

トウダイグサ科の多年草。松本雅人氏が横浜市瀬谷区の米軍通信隊付近の畑地で採集された。南米原産で日本では沖縄に帰化している。本州でははじめての帰化の記録と思われる。ショウジョウソウに似ているが、苞葉は黄色を帯びるだけで、紅色にはならない。池原(1979)「沖縄植物野外活用図鑑 第3巻 帰化植物」に写真が出ている。

ハナビゼリ *Angelica inaequalis* Maxim.

セリ科の多年草。神奈川県植物誌(1958)では山北・丹沢山とあり、都立大学には箱根宮ノ下産で、1907年に採集された標本(MAK-121146)が残されている。神奈川県



ハナビゼリ

植物誌1988では確認できず、神奈川県レッドデータ生物調査報告書(1995)でも絶滅種として扱った。昨年(1997年)夏に箱根の須雲川の谷を箱根ブロックで調査した際に、それらしい植物が見出された。自信がなかったので、秋に再度訪れ、果実のついたものを採集し、油管の配置などを確認したところ、間違いなくハナビゼリであった。全体にイワニンジンに似ているが、葉は質が薄く、茎や花序はまったく無毛である。果実の油管は稜の間に3個ずつある。

川崎市川崎区に追加される植物

(武井 尚)

川崎区は多摩川と鶴見川によって作られた三角州と、海岸を埋めた埋立地から成り立っている。地形は平坦で川や暗渠はなく、田畑もない。市政の中心地であり埋立地は京浜工業地帯に属し、埠頭がある。1996年同地の植物調査をした結果、次の追加植物があったので報告する。同地の植物の多くは自生ではなく、他地から持ち込まれたもので、いずれも逸出し、野生化している。

カニクサ(四谷下町)、コウヤワラビ(殿町3丁目多摩川原)、コガマ(東扇島)、コヌカグサ(四谷下町)、ノハラスズメノテッポウ(殿町3丁目・浮島町・東扇島)、ヒゲナガスズメノチャヒキ(小田7丁目)、タイヌビエ(浮島町)、ツルスズメノカタビラ(田辺町・日進町・日の出1丁目)、ミスジナガハグサ(浮島町)、ホソバナガハグサ(東扇島)、イヌアワ(大師河原1丁目)、オニシバ(殿町3丁目多摩川原)、オカメザサ(江川2丁目)、ミコシガヤ(東扇島)、ショクヨウガヤツリ(浮島町)、メアゼテンツキ(扇町)、ヒメウキクサ(浮島町)、トキワツユクサ(浅田4丁目・日の出2丁目)、イ(池上新町2丁目)、シンテッポウユリ(田町3丁目)、トゲナシサ

ルトリイバラ(東扇島),ナガイモ(鋼管通2丁目・塩浜1丁目・夜光2丁目・南渡田町・水江町・港町・下並木),ナミキドコロ(浮島町・大師河原1丁目),シダレヤナギ(塩浜3丁目),バッコヤナギ(東扇島),ムクノキ(夜光1丁目・富士見1丁目),ヤブマオ(大師河原1丁目・鋼管通5丁目・南渡田町),ヤブマオ × ツクシヤブマオ(桜本2丁目),ウスバラセイタソウ(大師河原1丁目・下並木),ソバ(小田7丁目),ハイミチヤナギ(浅野町・江川2丁目・大島5丁目・大師公園・田島町),ヒメツルソバ(田島町・日の出2丁目),ソバカズラ(小田5丁目),イノコズチ(池田町),コボタンヅル(水江町),ムベ(京町3丁目),アブラチャン(田町3丁目),ムラサキケマン(大川町),ケナシチャンパギク(扇町),オランダガラシ(浮島町),キレハマメグンバイナズナ(浮島町・東扇島),オハツキガラシ(白石町・東扇島),ノハラガラシ(東扇島),ヒメイヌガラシ(日の出2丁目),ハマカキネガラシ(東扇島),マルバマンネングサ(大島5丁目),オカタイトゴメ(扇町・日の出1丁目・浜町・観音2丁目・中瀬3丁目・小田3丁目),カザンデマリ(田島3丁目),タチバナモドキ(浅野4丁目),オオシマザクラ(鋼管通5丁目),ヤマザクラ(田辺新田),オオヤマザクラ(大師河原1丁目多摩川原),クサイチゴ(池上新町),アメリカツノクサネム(東扇島),オランダフウロ(千鳥町),シンジュ(京町3丁目・浜町4丁目),センダン(千鳥町),ハイニシキソウ(千鳥町),ニシキソウ(浮島町・台町),キダチミカンソウ(観音1丁目),ツルウメモドキ(塩浜4丁目・四谷上町・浅野町),ゼニアオイ(江川2丁目・浮島町・観音2丁目・千鳥町),アツバスマレ(四谷上町),スマレ(大川町・日の出町),タチツボスマレ(観音2丁目・昭和2丁目),ノジスマレ(中瀬3丁目),ケナシノジスマレ(中瀬2丁目),ヒメスマレ(鋼管通1丁目・昭和2丁目),カミヤ

ツデ(塩浜4丁目),ミズキ(南渡田町),カキノキ(鋼管通5丁目),ツルニチニチソウ(田町2丁目),カロリナアオイゴケ(塩浜4丁目・四谷下町),マルバルコウ(浅野町),マルバハッカ(塩浜4丁目),ヒメジソ(殿町3丁目),センナリホオズキ(浅野町),ケイヌホオズキ(東扇島),ムラサキサギゴケ(浮島町),ムシクサ(浮島町),ケバノオオバコ(江川2丁目・日進町・浜町1丁目),アカネ(日の出町),キキョウソウ(扇町),ヒメヨモギ(浮島町),フランスギク(京町),マメカミツレ(塩浜1丁目),ヘラバヒメジョオン(池上新町・江川2丁目・大川町・塩浜4丁目・大師公園・東扇島),イヌカミツレ(大師河原1丁目)

註1. ノハラスズメノテッポウ(キタスズメノテッポウ)は小穂の長さ2~2.5mmのもので,やや乾燥した土地に生える。高橋秀男氏も間違いないだろうとのこと。「神奈川県植物誌1988」ではスズメノテッポウと区別はしていなかったが,他にもあると思う。

註2. カヤツリグサ科は勝山,イラクサ科,アブラナ科は城川,スマレ科は高橋の各氏に同定をお願いした。

註3. 標本は県立博物館に提出してある。

ホクリクイヌワラビ?

(山本 明)

本年1月中旬に上野勝典氏が三浦半島観音崎[YO-2]で,ウラボシノコギリシダ類似品を採集された。標本はソーラスをつけたものと,つけないものの2枚があり,根茎はなく,葉柄の鱗片も落ちてしまっているが,検討の結果次のようなことが認められた。

- 1) 葉の二型性は,ややあいまいである。
- 2) 葉質はやや薄い洋紙質であるが,枯れてはいなく,緑が保たれている。

- 3) 葉形は羽片の切れ込みが深く、先端がやや頂羽片状になる。
- 4) 葉柄や中軸、羽軸の色は淡紅色。
- 5) ソーラスは円形のものの中に半月形やカギ形のもの混じる。
- 6) 胞子嚢は縮んでしまい、胞子はできていない。

これらはウラボシノコギリシダとイヌワラビの形質が共に現れており、胞子嚢や胞子の状態から見て、両者の雑種のホクリクイヌワラビであろうと推定された。

そこで、千葉中央博の中池敏之先生に標本のコピーを送り、見ていただいたところ、多分ホクリクイヌワラビでよいと思うが、羽片の切れ込みが典型品より少し浅いのと、秋に出た葉で条件が悪いと、胞子の出来が悪くなることがあるので、よい時期に現地でもう一度確認してほしいとのご意見であった。

今回の標本が、ホクリクイヌワラビにしても、ウラボシノコギリシダであっても神奈川県新産になるので、さらに慎重に観察を続けたいと考えている。標本の検討を許された上野氏、ならびにご意見をいただいた中池先生に深謝致します。

セイコノヨシ横浜市南区に健在

(河濟 英子)

セイコノヨシ *Phragmites karka* Trin. は、別名セイタカヨシともいうイネ科の多年草である。神奈川県植物目録(1933)や神奈川県植物誌(1958)には鎌倉・横浜に記録があり、県博には長谷川義人氏が1979年に南区中里町で採集した標本が収められている。しかし、神奈川県植物誌1988の調査では確認されず、神奈川県レッドデータ生物調査報告書(1995)では「…南区中里の産地は失われた。…最近鎌倉周辺からの報告はない」とし絶滅種と評価している。ところが、1997年10月24日、南区中里2丁目の一

角に生育していることを18年ぶりに再確認できたので報告する。

もともと、神奈川県では湿地に稀な種とされるが、長谷川氏は昭和30年代の自生地として中里及び大岡川の岸を挙げている。付近は30年代後半以降、住宅地へと変貌し、コンクリート護岸化も進み、少なくともその地点での本種は絶えたと思われていた。此の度、筆者は住宅地の中の駐車場の縁に沿って十数メートルに渡り、垣根状に立ち並んでいるのを発見した。敷地の一方の端には根元数センチを残し刈られた株がズラリと見え、もう一方の端には丁度開花期の花序を付けたものを含め数十本の稈が立っていた。(これらも一週間以内に一本残らず刈り込まれた。) 3.5mにも達



セイコノヨシ

する丈と稈に対し鋭角を成す葉身,1cmに充たない小穂から「ひょっとするとこれは…」と思い標本を作成。12月の横浜ブロック研修会の折に高橋秀男先生に確認していただいたところ、「セイコノヨシ」に間違いのないとのこと。家々が立て込む中で大型のヨシは早めに除草にあうため、出穂するまで育つことは稀で、自宅から至近でありながら見逃していた。改めて一帯を調査し直してみたが、大岡川の河川敷にはヨシのみで、他では一ヶ所も見出せなかった。駐車場は「別所の丘」斜面の下端に当たるが、その周辺には湧水らしきものもなく、よく突き固められた地面の表面は全く乾燥しきっているように見える。好適な生育環境とはとても思えないのだが。かつて深沢で見られた以上、今後相模沖積低地での再発見も期待できるであろうが、市内では、これがわずかに残った唯一の自生であるのかもしれない。

横浜のフシネキンエノコロ

(河濟 英子)

横浜市内を調査中に、神奈川県では初めての記録と思われるフシネキンエノコロ *Setaria gracilis* Kunth を採集し、標本を横浜市こども植物園、県博に収めたので報告する。

1996年10月9日、南区中村町4丁目、久良岐橋近くの路傍でコツブキンエノコロに似たエノコログサ属の植物に気付いた。中村川沿いの植込みの中、サツキの陰に3株生えていた。内、最も成長した株の一部を掻き取るようにして採取。

1997年6月13日、中区桜木町1丁目の空き地でスズメノチャヒキに混生するカラスノチャヒキを採集中、同種と思われる植物が眼に入った。見回すと稈を40本近く有す大きな株が数株点在している。一

株を抜き取り分割して標本を作成した。

同年7月3日には前年発見した南区の植込みの中から、旧年の稈の確認される株も採集できた。これら数枚の標本を図鑑と照らし合わせてみたが、その根茎の形状、極端に細い花序等、フシネキンエノコロの特徴とよく一致した。その後、先生方に検討をお願いしたところ、今回確かにフシネキンエノコロであると同定していただいた。

1997年10月時点で、中区の空き地では、大きなものは「踏み付け」によって跡形もなく消失し、今年発芽したと思われるごく小さな株が数株残っているだけである。一方、南区では、以前からの株の周囲に大小合わせて14株を見出せた。

筆者が上記二ヶ所で観察した範囲での、フシネキンエノコロの特徴(類似のコツブキンエノコロから区別される点)は次の通りである。多年草。節のある硬い根茎(ナイフで切り分けねばならぬほどに硬化)。くの字に立ち上がる稈(そのため、株元から稈が円形に並び立つ独特なシルエットを形作る)。稈の基部のみならず中部からも分枝する。(時に基部より6~7つ目の節まで)葉身の幅は2~3mmのものが多い。現地に於いては、出穂・開花は6月から始まり10月まで連続する。花序の幅は刺毛を除いて4mm以下。刺毛は濁らない黄色~黄金色。小穂の長さは2~2.3mm。第二小花の護穎は結実時には暗紫色を帯びる。

種小名 *gracilis* (か細い・華奢な)の示す通り、各部全てがほっそりとした姿は一見して他のエノコログサ属とは異なる印象を受ける。また、第二小花護穎の表面に横縞を有し且つ6月~7月に開花するものは本種のみと思われる。その点からも見分けられよう。暖~亜熱帯に広く分布するが、国内では静岡県で初めて採集され、



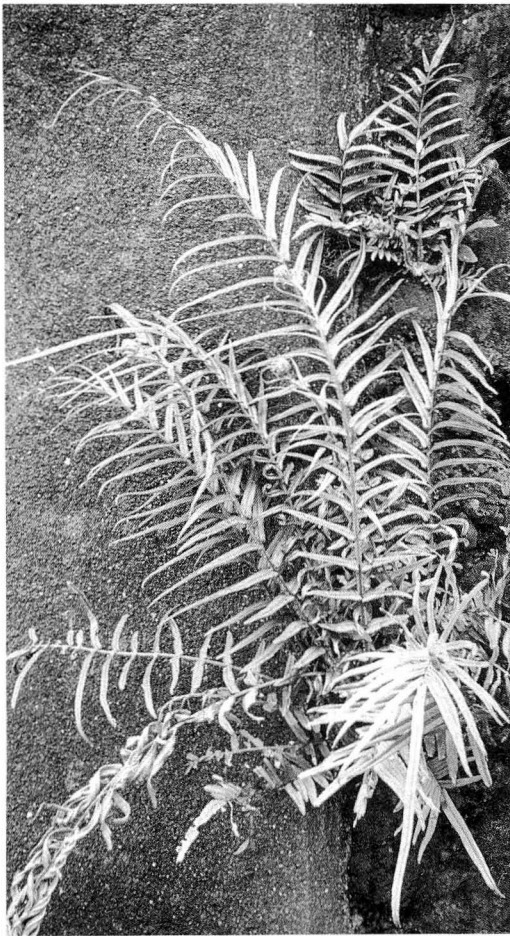
1
a: フシネキンエノコロの全体, b: 同花序, c: キンエノコロの花序. (スケールは5mm)

沖縄本島および大東諸島に「戦後帰化」として記録がある。市内では、以上の特徴のいくつか合致するものが複数目撃されており、横浜近辺には近年意外と個体数が多いにもかかわらず見過ごされてきたとも考えられる。

モエジマシダ横浜市神奈川区で発見 —国内帰化か逸出?—

(後藤昭子)

私が最初にこのシダに出会ったのは1997年4月8日であった。JR東神奈川駅付近を散策中、孝道山に行こうと露地の坂道を登ると、古い石垣に突き当たり、行き止まりになった。門構えは大きく立派だが、門かぶ



モエジマシダ

りの松や植木があり、その下は草がぼうぼうと繁茂し、廃虚のように見えた。この石垣には、今まで見たこともないシダが繁茂していた。園芸種かなと思いつつ標本用にと採集してきたが、名まえもわからず、そのままになっていた。

その後、10月29日、葉は30cmほどになっているものがあり、胞子のうを包み込むように、葉のふちが反り返っていた。再び採集し、標本を作成した。

1998年4月になって標本を整理中、林辰雄先生、高橋秀男先生に見ていただき、モエジマシダ *Pteris vittata* L. (イノモトソウ科) と同定して頂いた。しかし、亜熱帯性のシダがどうして、神奈川区に生育しているのか不審がられた。

4月14日、とても気になり再び確認に行ってきた。株は小さいながら、ざっと数えて40株ほどが石垣にへばりついていて、どうしてこの地に根を下ろしたのか、その由来を知りたくて、近所の家を訪ねて見たが、わからなかった。ほかの石垣にも、あちこちに点在しているのが見られた。

高橋先生が送ってくださった「日本シダ植物図鑑」によると、「亜熱帯性のシダで繁殖力は強いが、冬期0度以下では越冬が困難である」と記してある。南に面した石垣と、道路の輻射熱などで、この地は零下にはならないのであろうか、あるいは横浜市内で長い間栽培してきた結果、寒さに対する抵抗力の強い系統が生まれ、それが逸出したものであろうか、何とも不思議な現象だ。

神奈川県シダの帰化種としてハウライシダが知られるが、本種は第2の帰化種となる。

今の生育地は局限されているが、これが将来分布を拡大していくかどうか、今後観察を続けてゆきたいと思っている。ちなみに、日本における分布を、前記「日本シダ植物図鑑」で見ると、北限は和歌山県で、四国は愛媛県、九州、沖縄となっている。

ササ情報

(城川四郎)

I 神奈川県植物誌1988には採録されなかった種類

①ミナカミザサ

Sasa senanensis f. *stenatha*

松田町虫沢林道 98.4.28

枝1本、下&中部分枝。肩毛粗澁クマザサ型。稈鞘、葉鞘無毛。葉裏有毛。葉幅極めて広く7cmに達する。

★葉の最下のものが無毛であることを重視すれば室井氏のメクマイザサにあたる。

★本種は東北地方や日本海側に分布するもので神奈川県での自然分布は考えられないから何かの理由で栽植され逸出したものであろう、近くに神社、仏閣もなく人家もない林床に一見自然的な小群落を形成している。

②オオシダザサ *Sasa oshidensis*

湯河原町白銀林道から幕山方面途中

97.2.19, 97.11.11

枝1本、中&上部分枝。肩毛粗澁クマザサ型。稈鞘は節間1/2以上で粗毛がある。葉鞘無毛。節は低い。葉裏無毛。

★ナンブスズ節に属し、一見スズタケに似るが稈鞘がより短く節間が露出していること、肩毛が発達することで識別できる。観察群落は小さい。

③タキザワザサ *Sasa takizawana*

相模湖町奥畑 96.11.14

枝1本、中&上部分枝。肩毛は脱落して観察できず。稈鞘は節間1/2以上で粗毛&逆行細毛あり。葉鞘無毛。節は低い。節間に逆行細毛あり。葉裏有毛。

★荒れた山林の林床にあり群落の規模は未調査。

④ケスエコザサ

Sasaella atamiana var. *kanayamensis*

箱根町長尾峠から仙石原方面に下る途中

97.11.18

枝1本。肩毛は基部粗澁、上部平滑、アズマザサ型。稈鞘に開出毛がある。葉裏有毛。葉表面に粗長毛が散生。

★箱根のアズマザサ属は極めて多型で、整理に困惑し、多くの課題を残しているが本種は葉の表面の毛が特異的で識別しやすい。観察した群落は小さい。

⑤オニグショウシノ *Sasaella caudiceps*

厚木市七沢森林公園 96.11.11、湯河原町土肥大杉跡から白銀林道に下る途中

97.2.19

枝1本。肩毛は基部粗澁、上部平滑で、アズマザサ型。稈鞘に粗毛と逆行細毛がある。葉裏は無毛。

★植林地の林床に小群落を形成。

⑥シブヤザサ *Pleioblastus shibuyanus*

秦野市大倉 97.11.24、横須賀市野比

98.3.24、平塚市小向愛宕神社 98.5.21

枝は不定複数。肩毛白色平滑直立。葉耳ほぼ水平。稈鞘、葉鞘無毛。葉裏有毛。

★本種はアズマネザサの近似種で、同種とは葉裏が有毛である点で識別される。前回の調査では洩れているが希少なものではなく県内広く分布するものと思われる。

1964年の丹沢大山国定公園学術調査報告書では浅野貞夫氏らが札掛付近に分布することを記している。

II 神奈川県植物誌1988に採録されているササの一部情報

①マキヤマザサ(ヒダノミヤマクマザサ)

Sasa maculata

藤野町上岩林道 96.4.25

枝1本、中&上部分枝。肩毛粗澁クマザサ型。稈鞘は逆行細毛がある。葉裏有毛。節は高い。

★前回調査でこのササが発見されたのは、大場達之先生が葉の表面の毛の多いことに注目されたからであった。しかし、本種の特徴形質として葉表面の毛については

解説されていない。

★今のところ県内分布地は1点だけであるが、その群落はかなり大きい。

②オモエザサ *Sasa pubiculmis*

相模原上九沢相模川歩道 97.12.19

枝1本、中&上部分枝。肩毛粗澁クマザサ型。稈鞘は逆行細毛があり(節間にも逆行細毛がある)、葉鞘有毛。葉裏有毛。節は低い。

★今回採集の小群落は人為的影響で早晚消滅するものと思われる。

③シオバラザサ *Sasaella shiobarensis*

相模原市大島 97.11.11、秦野市羽根林道 98.1.13、秦野市大倉 98.5.5、松田町湯の沢 98.5.7

枝1本。肩毛は基部粗澁、上部平滑で、アズマザサ型。稈鞘無毛、葉鞘粗毛がある。葉裏有毛。

★本種はアズマザサの近似種で、同種とは葉鞘に粗毛があることで識別される。

★前回の調査では分布が1点だけ示されているが、かなり広い分布域を持つものと考えられる。

④トヨオカザサ *Pleioblastus humilis*

箱根町湯坂道 97.11.25 逗子市神武寺 97.7.6

枝は不定複数。肩毛白色平滑直立。葉耳ほぼ水平。稈鞘無毛、葉鞘有毛。葉裏無毛。

★本種はアズマネザサの近似種で、同種とは葉鞘が有毛である点で識別される。前回の調査では分布点が少ないが希少なものではなく県内広く分布するものと思われる。

「神奈川県植物誌1988」で取り上げられていない帰化植物ほか(1)

(田中徳久)

「神奈川県植物誌1988」では、日本新産のものも含め、多くの帰化植物が掲載されており、過去に記録はあるが、採集

されることのなかった帰化植物についても触れられている。しかし、最近、「植物誌1988」に掲載されていない“忘れ物”が発掘されつつある(勝山, 1997)。ここでは、勝山(1997)の報告後、発掘された忘れ物について報告する。

ハナハコベ *Lepyrodectis holosteoides*

浅井(1953)により、1952年、藤沢市片瀬の路傍で採集されたことが報告されている。

ハナヤブジラミ *Caucalis daucoides*

浅井(1963)により、1951年、藤沢市付近で採集されたことが報告されている。

オオヒカゲミズ *Parietaria pensylvanica*

初島(1987)により、森茂弥氏が横浜市神奈川区出田町で採集した標本に基づいて、報告されている。この標本は、勝山(1997)により発掘された、ヤンバルツルマオ *Pouzolzia zeylanica*として森(1977)により報告されているものである。森(1977)・初島(1987)によると、当初より、ヤンバルツルマオとは多少異なる点があり、疑問品であったようである。したがって、現段階では、神奈川県ヤンバルツルマオの記録は削除されるべきものである。

コバナキジムシロ *Potentilla amurensis*

大谷(1977)により、横須賀金谷で採集されたことが報告されている(神奈川県新産)。しかし、「植物誌1988」の調査では採集されず、記述からも洩れていた。しかし、最近になって、相模原市麻溝台で、調査会会員の岩瀬理恵氏により採集された。

文献

浅井康宏, 1953. 新帰化植物ハナハコベ. 植物研究雑誌, 28: 112-113.

浅井康宏, 1963. セリ科の外来品2種を記録する. 植物研究雑誌, 38: 349-350.

初島住彦, 1987. 帰化植物オオヒカゲミズ(新称). レポート日本の植物, (31): 110.

勝山輝男, 1997. 忘れ物. FLORA KANAGAWA, (45): 502.

森 茂弥, 1977. 横浜の新帰化植物三種. 植物採集ニュース, (90): 68.

大谷 茂, 1977. 横須賀市の帰化植物2種—コバナキジムシロとコメツブツメクサ. 植物採集ニュース, (91): 91-92.

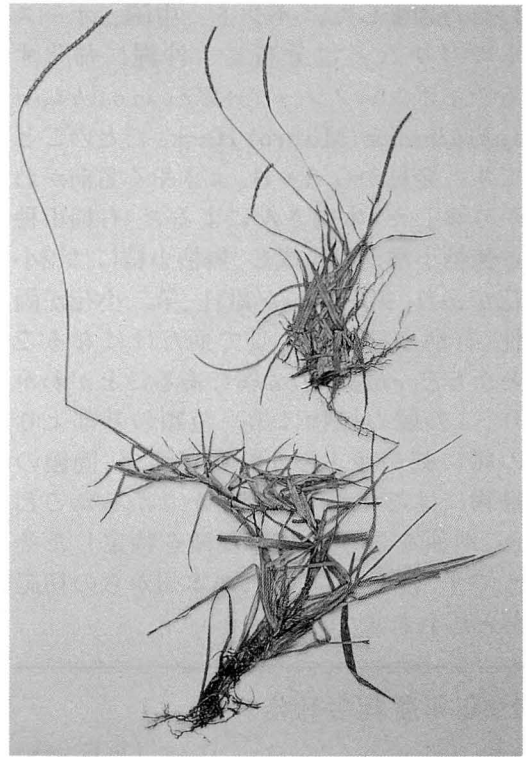
チャボウシノシッペイ

(埜村恵美子)

この植物が生育する辻堂海浜公園は、かつては辻堂砂丘と呼ばれるほどの広い砂浜でしたが、昭和35年にできた国道134号で海岸とは隔てられ、北側は大規模な団地ができ、その間に残った砂浜も、昭和46年に辻堂海浜公園となり、プールや交通公園が次々と造られ、今ではほとんど無くなってしまいました。それでも公園周辺の松林には湘南海岸が基準産地のハマカキランの自生が見られ、ハマエンドウ、ハマヒルガオなどの海浜植物やその他思いがけない植物が見られるので興味深い場所です。

1997.8.20に、この公園の中にある池のまわりで、テンツキ、イガガヤツリ、ヒデリコなどを見ようと出かけました。池の周囲に石が配置されていて、その側に細長い穂をつけたイネ科の植物が目につきました。近くにウシノシッペイがあったので、生育の悪いそれかとも思いましたが、2本出ていた穂の1本を採集して帰って調べてみましたがウシノシッペイとは違うようなので、疑問符付きの標本にしました。

1997.9.20に、また別の植物(昨年採集できなかったイヌハギ)が目的でこの公園を訪れ、前述の池にも寄ってみました。池の周囲の芝の中に点々と穂が見え、シバの穂と思い行きかけましたが、花期も形も違うと気づき、見直すとこの前のウシノシッペイに似た穂でした。道具を持たなかったの



チャボウシノシッペイ

で手で引きぬいて何本か採集して持ちかえりました。平塚博物館にコバナウシノシッペイとして持って行きましたが、違うようだといわれ、これは今までに県内では記録の無い種類だと思いました。その後、県博に持参して木場さんに見ていただきましたが、日本の植物図鑑にはない種類で、結論が出ませんでした。

1997.10.8に公園内の様子を見に行ったところ、無数の穂が乱立していて最盛期のような様子でした。良く観察すると、シバの中に生育しているのではなく、シバと思ったのはすべてこの植物でした。今回は道具を使って丁寧に掘ってみると、茎はシバのように地上を這って、節ごとに左右に出た枝が立ち上がり、扁平な鞘から出る葉は5枚くらいで、所々に花穂を立てていました。

しばらくして、木場さんから、お返事を

いただきました。インド、中国、オーストラリアなどに分布し、沖縄に帰化するチャボウシノシッペイ *Eremochloa ophiuloides* (Munro) Hack. だとのことでした。発見から3ヵ月、ようやく名前がわかりました。木場さんによると、有柄小穂と無柄小穂が対を成し、無柄小穂には2小花があり、第一小花が雄性、第二小花が両性、有柄小穂は退化して柄だけになることから *Eremochloa* 属であることがわかり、この属の植物は第一苞穎の基部よりの縁に刺が並ぶのが特徴ですが、問題の植物にはごく小さな刺しかなかったことと、地面を這うことから種を特定したそうです。おそらく、これが本州からの初記録と思われまます。

1998年度総会報告

(事務局)

1998年度の総会が、1998年2月28日(土)、横浜市こども植物園研修室で開催されました。城川会長のあいさつに続き、1997年度の事業報告、決算報告がなされ、1998年度の運営体制と事業予定、予算が審議され、可決されました。今年度の総会は、春先の調査シーズンに間に合うよう、1997年度中に開催したため、変則的ではありますが、会計報告等は、2月はじめで決済し、以降は1998年度分の予算とすることにしました。

その後、植物誌改訂のための調査についての説明と、各ブロックの活動状況の報告がありました。続いて、大場達之氏からチガヤとフシゲチガヤ、タカサブロウとアメリカタカサブロウについて、勝山輝男氏からヒユ属の分類につて、木場英久氏からチャボウシノシッペイについて、古川冷實氏からスズメノカタビラ類について、それぞれ話題提供があり、盛況のうち、閉会しました。

●1997年度 事業報告

1997年4月19日 1997年度総会(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1997年5月17日 執筆者会議(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1997年5月31日 フロラカナガワ44号発行
1997年6月22日 執筆者会議(平塚市博物館)

1997年11月20日 フロラカナガワ45号発行
1998年2月11日 運営委員会

『昀山泰一先生卒寿記念論文集』の販売(継続)
『昀山泰一先生卒寿記念論文集』の新しい植物誌会員への配布

長野県植物誌への協力(基金は返金)

※各ブロックごとの活動報告は割愛しました。

●1997年度 決算報告・監査報告

[会員動向]

年度当初	230名
新入会	15名
退会	10名
合計	235名

男・木場英久・田中徳久

作業委員 ブロック事務局十執筆者

ブロック事務局

横 浜：高橋秀男・堀川美哉・武智憲治

川 崎：吉田多美枝・吉田三夫

三 浦：山田友久・青木清勝・大森雄治

湘 南：守矢淳一・浜口哲一

厚 木(小)：諏訪哲夫・佐藤恭子・槐 真史

相模原(小)：守屋博文

津久井(小)：小崎昭則

箱 根(小)：井上香世子・古川公貴

その他：城川四郎・勝山輝男・木場英久・
田中徳久

編集委員 城川四郎・大場達之・大森雄治・

小崎昭則・浜口哲一・山本 明・

高橋秀男・勝山輝男・木場英久・

田中徳久

会計監査 諏訪哲夫・秋山 守

事務局 勝山輝男・木場英久・田中徳久

※ 作業委員は、植物誌の改訂のための調査などの調整作業を行い、各ブロックの事務局と執筆者で構成される。

※ 川崎ブロック・相模原(小)ブロックの事務局は、担当者の転勤に伴い、総会時とは変更になりました。現在は川崎ブロックは吉田多美枝氏・吉田三夫氏、相模原(小)ブロック守屋博文氏です。

●1998年度 事業計画

『神奈川県植物誌1988』改訂のための検討・調査

フロラカナガワの発行(年3回、4月・9月・1月頃を予定)

野外研究会・標本同定会

(基本的に各ブロックが主催し、事務局は連絡を受け持つ)

『初山泰一先生卒寿記念論文集』の販売促進(継続)

※会員(とくに新入会員)で、記念論文集を受領していない方は、事務局までご一報下さい。

●1998年度 運営体制

顧問 初山泰一

代表 城川四郎

運営委員 秋山 守・大場達之・大森雄治・
小崎昭則・小原 敬・笠原基知治・
北川淑子・小林純子・鈴木一喜・
諏訪哲夫・高橋秀男・西山清治・
長谷川義人・浜口哲一・守矢淳一・
村上司郎・山本 明・勝山輝

編集作業

2001年3月「神奈川県植物誌2001」出版

2. 調査の進め方の確認と修正

1996年度当初に配布した各メッシュごとの標本リストにもとづき、補充調査を進めてきたが、一部うまく機能していない部分もあり、以下のような方策により、残り2年間の調査を進めていく。

① ブロックごとの穴埋めリストにより、穴埋めのための採集を行う。

② 穴埋めリスト中の要注意欄に「全県」「以東」等の記載があるものは、該当地域で、1996年に配布したメッシュごとの採集リストなどを参考に、過去の標本採集地周辺における植物の現存の確認と、別の産地(別の3次メッシュ)における標本の採集を行う。

③ 穴埋めリスト中の要注意欄に「注意」の記載があるものは、チェックリストと同時に作成された要注意植物リストに基づき、各調査メッシュで再度、標本の採集を行う。

④ 全種について、各調査メッシュごとの推定比較数量(「多」「普」「少」「稀」の4段階;「平塚植物誌」を参照)についてのデータを収集する。なお、推定比較数量のデータは、担当者ごとに③のリストに記録し、ブロックごとに集約し、事務局で取りまとめる。

●「植物誌2001」のための調査について

作業手順の整理に伴い、総会時の説明とは一部異なっていますが、概略は変わっておりません。チェックリスト等はブロック事務局に配布してありますので、ご活用下さい。

1. 今後のスケジュール

基本的に、2000年の前半までが調査期間となるが、実質的な調査は、1999年で終了し、その後は補充調査となる。

1998年5月 執筆要綱・サンプルの配布

1999年4月 暫定版分布図の作成

2000年5月 原稿提出

原稿の確認

編集後記

FLORA KANAGAWAはいつも冊子の体裁の都合で、4の倍数のページ数で発行しています。レイアウトを工夫してみたのですが、投稿順が最後だった城川氏の原稿が、次号送りになりそうでした。せっかくお送りいただいた情報が新鮮なうちにと、某氏にお願いして、頭の中で温めていた原稿を、書いてもらいました。おかげで、投稿いただいた原稿はすべて掲載できました。年度内にあと2回の発行を予定しています。ふるって投稿くださいますようお願いいたします。